

## 顕現後第6主日 朝の礼拝について考えてみよう

先日、宮崎の信徒総会、今年からは堅信受領者総会ということになったのですが、昨年の統計を見て感じたことを話しました。聖餐式の出席者に比べ、み言葉の礼拝への出席者が少ないことに気づかされました。聖餐式ではパンとぶどう酒がいただけて、自分自身がキリストに似た者になる、目に見える印が与えられる、ということでありがたいのだけれど、聖餐式の礼拝の形とほとんど似ていて、しかし聖餐だけはもらえない、ちょっと騙されたような礼拝、という印象を持つのかもかもしれません。

3年前の顕現後第6主日、私はどんな説教をしていたのだろうか、と過去の説教を見てみると、今の宮崎での私の立場とよく似た状況だったのです。その説教をする前の日曜日、宗像で信徒総会がありました。それに続いて、2月の教会委員会を開いたのですが、その年から牧師が、月の半分の日曜日を八幡に勤務になり、信徒による朝の礼拝を行わなければならない、ということで、朝の礼拝が、聖餐式と同様、いかに大切であるか、大斎節の勉強会で学べるようにしてほしい、ということになりました。

私が前に勤務していた宗像と八幡の人々は、私とその教会の牧師になる前から、み言葉の礼拝は拒否して、現在も朝の礼拝を守っているのです。

今では、この教会では朝の礼拝は行っておりません。月1回の英語の礼拝が、朝の礼拝と対を成す、夕の礼拝になっているのですが、今日はちょっと、朝夕の礼拝のことについて、知識として覚え、できたら、この朝夕の礼拝にも親しみを持っていたきたいと思います。ですから、今日は、本日の福音書の内容には触れません。

宗像は、3年前までは、今の宮崎同様、私が月1回だけ、他の教会で働くという状況でしたが、3年前からは、牧師が日曜日は半分留守をすることになる、ということで、信徒による朝の礼拝が、月2回行われることになりました。そうすると、信徒の中には「聖餐式が大切で、しかし牧師がいないから、留守の時は、しかたなしに朝の礼拝をしているんだ。」というふうに受け取る人がいます。

総会の時には、その問題が表に出てきませんでした。その後の2月の教会委員会で、信徒による朝の礼拝が、いかに大切なものであるか、大斎中、朝の礼拝の意義について、勉強会をするように要請されました。

皆さんが月1回行っている「み言葉の礼拝」の最初の小さな文字の解説には、「主日またはその他の祝日に聖餐式が行われない場合、朝の礼拝または夕の礼拝に代えて用いることができる」ということが書かれています。この文章から、どんなことを想像されますか。

朝の礼拝などは、聖餐式よりも劣ったものであるかのように受け取る人がおられるかもしれません。しかしそうではないのだ。朝の礼拝には、聖餐式とは違う、はっきりとした中身、目的があるんだということ。その中身、目的をはっきりと理解して、守っていただきたいと思いましたので、その話をします。どうも私は「み言葉の礼拝」というのは、聖餐式の代用品のように思ってしまうのです。

みなさんがお持ちの、祈祷書の最初を開いてください。「救主降生1990年日本聖公会祈祷書 日本聖公会管区事務所」と書かれているのが最初でしょうが、それを一枚めくっていただくと、

「本書は聖なる公会の公禱、聖奠（サクラメント）および諸式を載せたもので、日本聖公会の所用に属する」と書かれています。

ついでに、日本聖公会法憲第2条を読むと、

「教会は一定の礼拝所を所有し、主教の派遣した司祭が信徒と共に定時に公禱、聖奠および諸式を執行する。」と書かれています。

それじゃ、「公禱、聖奠および諸式」とは何でしょうか？

朝の礼拝は、この三つの中で、どれに属すると思いますか？

公禱です。公のいのりですね。それじゃ、聖餐式はどうでしょう。これは聖奠（サクラメント）です。聖奠には、洗礼と聖餐があります。諸式に属するのは、葬送の式や牧師任命式、礼拝堂聖別式などで、これらは、必要に応じて行う礼拝であって、私たちの日常とは少しかけ離れています。

これらの三つのものは、だいたい祈祷書の最初から、公禱、聖奠、諸式の区分で種類別に並んでいます。

細かいことまでは言いません。これらにはどんな違いがあるのでしょうか？

私は、その違いを改めて知るために、古い本を読み直しました。すると、大変面白いことが書かれました。公禱は、聖奠や諸式などとは、全く違った性格があるようです。それは、成り立ちの違いです。引用してみます。

私が神学校の学生だった30年も前に礼拝学の教科書として読んだ、シェパードという人の本からです。

「この一般の公禱を、他の式と区別いたします事は、歴史的な根拠があるのであります。諸聖奠や他の諸式は、我らの主や、あるいは教会の公的な決定によって備えられたものであります。しかし一方、教会の公禱は、厳密な意味におきまして、キリスト教徒の敬虔から自然に発生したものであります。それは本質的に信徒の礼拝と言われるべきであります。それらにはあながち聖職の司式が必要とせられていないのであります。」（シェパード著「教会の礼拝」より）

イエス様が、洗礼や聖餐式と呼ばれる聖奠を制定されましたし、堅信式や葬式、聖職按手式などは、教会が、はっきりとした目的をもって、制定したものです。成り立ちが良くわかるのです。しかし、朝夕の礼拝とか嘆願などの公禱と呼ばれるものは、熱心な信徒によって、自然発生的にできあがったものだ、という理解です。

\* 3年前に私がこの説教をしたら、「最近では聖餐式も公禱という理解がある」と反論する先生がおられました。聖餐式は公禱に入る、というのは、わかるとしても、信徒の自然発生的に行ってきた伝統が消えてしまうのを危惧しました。また、聖餐式が次の聖奠と重なって、曖昧になるように思えたのです。

祈祷書のことを、英語では、「ザ・ブック・オブ・コモンプレーヤー」と呼んでいます。「コモン」とは、「共通の」「共同の」という意味のほかに、「一般人」「庶民」という意味もあります。ですからこれは、「信徒の祈りの本」という意味だと私は気づいたのです。本当は、「ザ・ブック・オブ・コモンプレーヤー」その後に、「聖奠および書式」を意味する文章が小さい字で長々書かれています。それは今まで話してきたように、それぞれ意味があります。しかし、「ザ・ブック・オブ・コモンプレーヤー」という言葉が、タイトルとして、背表紙などに書かれていることに注目したい。歴史的には、「一般祈祷書」と訳してしまっていますが、「信徒の祈りの本」というのが、正しい翻訳だろうと、私は思います。

「祈祷書が聖公会の宝だ」ということは、よく言われていることですが、その意味は、信徒がみんな聖職者と同様に「信徒の祈りの本」を持っている、ということです。それなら、「宝の持ち腐れ」にしないように、日常に活かす生活をする必要があります。

祈祷書の18ページ、朝夕の礼拝の次に書かれた、小さな字を読んでみてください。

「毎日聖書を朗読し、詩編を歌って神をほめたたえ、祈りを献げて日々の生活を神と人とのために清めることは、初代教会からの営みであった。」と先ずあります。

わたしたちの礼拝は、呼吸のようなものだとすることを聞かれたことはありませんか。

朝夕の礼拝で、私たちは、神様を賛美するために、聖歌や詩編や、ザカリヤの賛歌、賛美の歌など、私たちが神様に向かって声をあげて賛美します。しかし、それだけではありません。逆に神様の方から私たちに語りかけられるのを聞くという習慣もあります。第一日課、第二日課など、神様の言葉である聖書が読まれるのを聞いて、黙想しているのは、私たちが、神様の息を私たちの体に吸い込んでいることだと私は思います。

この、神様と私たちの交わり、呼吸をする習慣をつけるのが、「ザ・ブック・オブ・コモンプレーヤー」(信徒の祈りの本)の目的です。私たちは、教会で集まった時に、司祭と一緒にささげる聖餐式だけでなく、「朝の礼拝」などを通して、もっと自分の普段の生活に、聖書を読むことと賛美をするを取り入れるように習慣づけることが必要で、そのために「朝の礼拝」にも慣れていただきたいのです。

ローマ帝国がキリスト教を公認して、やがて国教になった頃、ヘブライ語で書かれた旧約聖書、ギリシャ語で書かれた新約聖書を、ローマ人にわかるラテン語に翻訳した、ヒエロニムスという有名な司祭がいました。正確に言うと、この人は、ギリシャ語に訳された70人訳という旧約聖書と、最初からギリシャ語で書かれた新約聖書を、ラテン語に訳したわけですが。この人は、その翻訳作業をイエス様が生まれたベツレヘムで行ないました。彼が読書黙想していると、その窓辺に周囲の畑から、詩編を歌う者の声が流れてきたことを、こんな風に書き記しています。

「その声は春の鳥の鳴く音に和して美しく耳にきこえ、花の香にまじって漂った。農夫は地を耕しながら歌い、麦刈る者、ぶどう園に働く働きびと、羊を飼う者などもまたダビデの歌(詩編)を唱えながら、そのわざをしていた。」(森讓著「信仰を生活する」より)

詩編の歌声が礼拝にも、日々の暮らしの中にも満ちわたるようになったら、素晴らしいことです。

先ほどの、朝夕の礼拝の解説の部分。

「毎日聖書を朗読し、詩編を歌って神をほめたたえ、祈りを献げて日々の生活を神と人とのために清めることは、初代教会からの営みであった。」

この言葉に続いて

「わたしたちも、「朝の礼拝」「夕の礼拝」によってこの営みに加わるのである。」と書かれています。

毎月、信徒によって捧げられる、み言葉の礼拝が、朝の礼拝同様、聖餐式のような教会の中だけの礼拝にとどまるのではなく、私たちの日常につながってゆくものになるようにできないものか。信徒による祈りが、もっと充実するように、工夫したいと思っています。

(参考資料)

米国聖公会の祈祷書のタイトル

提案された

Proposed

# The Book of Common Prayer

and Administration of the Sacraments  
and Other Rites  
and Ceremonies of the Church

Together with The Psalter or Psalms of David

According to the use of  
The Episcopal Church

The Seabury Press  
New York

一般祈祷書（信徒の祈りの本）

そして、聖奠の実施

また他の儀式

また教会の式典

詩編あるいはダビデの詩

米国監督教会（聖公会）